

【実施概要】

- ・実施日時：2026年7月31日（金）18：30-20：00 ANCHOR KOBE
- ・テーマ：室内管弦楽団を含む音楽分野への支援のあり方
- ・参加者：合計90名（会場参加64名＊うち関係者28名を含む、オンライン参加26名）

【パネリストからの主なコメント】

① 高次秀明 氏（公益財団法人岡山文化芸術創造 参与）

- ・オーケストラは都市ブランド構築や子どもの感性を育てる存在であることが、市民の理解を得ることにつながる。
- ・公的支援を受ける上ではあらゆるチャネルでの露出・認知度向上が重要。
- ・音楽や芸術は人と人の心をつなぐものであり、音楽家はその伝道者であることから優れた音楽家集団はその街の宝である。一方で公金で支えられる音楽家の立場としては、どうすれば市民に感動してもらえるか、本気で考え努力する姿勢が必要。

② 渡辺真二 氏（神戸商工会議所 副会頭、早駒運輸株式会社 代表取締役社長）

- ・スーパーキッズオーケストラやマザーポートクラブなどの立場から、中小企業としても工夫を凝らして支援している。
- ・音楽事業については、お金でなくても例えば広報など様々な支援の手法がありうる。
- ・ウェルビーイングの観点からも、文化やスポーツが元気である都市を神戸は目指すべき。各々、現場で（音楽事業が）点として活動しているが、線や面になっていかないといけない。神戸のみんなでやっているという空気が欲しい。

③ 水澤節子 氏（声楽家、神戸音楽家協会 代表幹事、長田文化協議会 代表、神戸クラシック協会 主宰）

- ・音楽家や行政が手を取り合ってそれぞれ尽力すれば、そんなに大きなお金がなくとも地域に根付いた、意味ある上質な音楽活動は実現できる。
- ・室内管弦楽団（以下、楽団）は公募をしてオーディションを行い、若い音楽家に門戸を広げるとともに、神戸市民が楽団の構成メンバーとなるべき。
- ・補助金は透明性高く公平に配分してほしい。

④ 佳山奈央 氏（ラヴィベル株式会社 代表取締役）

- ・子どもの成長過程で、どれだけ文化に触れられるかは、どのような家庭の子にとってもとても大切。
- ・民間でなく公共の支援を受けるためには、市民に資すること、かつ、適度な競争環境で磨かれることの両輪が重要。
- ・支援を受ける限りは、市民がその存在を知っていて一度は演奏を聞いたことがあるというような団体であるべき。また、認知度などの指標を設定し、それをモニタリングする仕組みも必要。

【会場意見】

① 質問：楽団への公的支援について、説明責任は果たされていると感じるか。

- ・会場：感じていない人が多数
- ・オンライン：感じている人が 60%、感じていないという人が 40%

②自由意見

- ・楽団を神戸のためにどう生かすかという視点が重要
- ・体験機会として、生音を聞く機会を確保することが大切。
- ・神戸が掲げるウェルビーイングに照らして音楽の必要性は明らか。楽団の動員人数は合格ラインでは。
- ・文化的コモンズ（文化空間や活動のネットワーク）の視点を持ってもらいたい

【まとめ（ファシリテーターより）】

- ・公共性と公益性は、極めて多様な視点がありうる。音楽の文化的価値、唯一性の価値、公平性、公益性（社会的還元）の拡大などに加えて、「神戸は音楽やスポーツを応援する都市であるべき」「文化は都市の競争力を作る」、という都市戦略の視点からの問題も議論がなされた。
- ・他方で、公的補助をうける条件として、大前提としての「市民に認知される」ことの重要性が論点となった。市民との接触の機会と頻度、場所、対象、楽団員や運営組織に関しても、市民に開かれていることの大切さを指摘する声が多く出た。公的支援を受ける側が、ある種の説明責任として当事者の努力を説明することも大切。
- ・今回を契機として高まった市民・関係団体のネットワークの動きから、資金以外の支援方法も含めてみんなで文化や音楽のことをもう一度考えるという行為自体も支援の一つではないか。市民に「文化について考える時間」を持ってもらうことも支援といえよう。